

佳作

私は『漫画家』になる

福島県郡山市立喜久田中学校

2年 熊田 茉桜

小さい頃から私は頭の中で物語を考える『妄想』が大好きだった。今でも考えない日はないほど好きだ。日常ではありえないことや、あったらおもしろいことなど私の頭の中は、まさにパラレルワールドにいるかのようなおもしろ頭になっていた。

小学3年生になると私は絵を描き始めた。きっかけは、「絵がうまくなれば好きなキャラクターに会えるかもしれない。」と考えたことからだ。少し考えればそんなことありえないと分かるが、このときの私は自分のことを天才かもしれないとすら思っていた。学校から帰ると、風のごとく宿題を終わらせると鉛筆を持って、いらぬチラシの裏に自分が描きたいポーズやキャラクターをたくさん描いた。夜ご飯の後も何枚も描いては、母や姉に見せていた。始めたばかりだったため姉にはとても笑われた。それでも楽しい、面白いとしか感じず、家に帰ってからのほとんどの時間は絵に費やしていた。

1年ほど続けていたある日私は、姉の部屋で漫画を見つけた。アニメが好きだったこともあり、そのもとである漫画を見つけると私はすぐに本棚から取り出した。表紙を見たとき、絵本などとは違う綺麗で大胆な構図にとっても感動した。そして1ページめくるとそこには、1コマ見て誰が何をしているか分かる圧倒的画力や自然と聞こえてくる主人公の声、上や下から見た躍動感あふれるアングル、しっかりとした構成のもと広がっていくストーリーなどが、黒の線でブレることなく描かれていた。私にはない圧倒的画力やストーリー性が宝箱のようにキラキラとしたものに見えた。

それから私は、今まで以上に絵を描くことに力を入れた。「私も早くこんなふうに絵を描いて自分の物語をたくさんの人に伝えたい。」初めは好きなキャラクターに会えるかもしれないと意味不明な理由で絵を描いていたが、このことがきっかけできちんとした『漫画家』になりたいという目標を持つことができた。そこからの2年間は絵をうまくするため1日たりとも絵を描かないことはなかった。本屋に行っているいろいろなジャンルの漫画を買ってみたりもした。特に私が好きなジャンルは異世界ものやファンタジーもの、バトルものだ。異世界ものやファンタジーものでは、どちらにも共通する物語が展開する国や民族、登場人物の周囲に息づく自然や生き物といった世界観にとっても憧れてしまい、バトルものではその迫力のあるバトルシーンで息をのむほどの緊張感が味わえ、

成長していく主人公や予想をこえてくるストーリー展開にとっても心が踊ってしまうからだ。

そして、中学校に上がると本当にこのままだ絵を描いているだけでいいのかという心配や不安を感じるようになった。なので私は基礎からやり直すことにした。人体を描くのが苦手な私は、絵についての参考書を買って、そこに書かれていた「クロッキー」という対象を短時間でものを捉えて描写する練習法を1日10分間することに決めた。その他にも本に描かれている人体の動きをスケッチブックに模写し筋肉の動きや体の特徴を学んだりもした。難しくても大変だが目標に一步でも近づいているような気がしてとてもやりがいを感じている。人体だけでなく、漫画でも一番大切といってもいいストーリーについても今の私の中にある『妄想』では、あやふやすぎる気がしたため、私は頭の中で一つ一つの場面を1コマに入れて漫画のように考えるようにした。今までは映像のようにして考えていたが、いざ頭の中で漫画を作ると、コマ割りがとても大変だった。進めていくうちに楽しくなり始め、漫画の醍醐味である伏線回収も少しずつ入れられるようになってきた。

漫画というのは私にとって、癒しから心の支えとなり、今では人生を賭けてでも作りたいものとなっている。漫画家の世界はよく才能の世界といわれる。いつか「現実を見ろ。」と言われるかもしれない。それでも私は自分の伝えたいものを持っている限りあきらめることはないと思う。私は『漫画家になりたい』のではなく『漫画家になる』と心の底から思っている。なりたいとなるでは違いなんてないのかもしれない。でも、なりたいという少し曖昧な言葉にしたくないのと、なるだけの覚悟をちゃんと持っている。それだけは分かってほしい。

今まで、「下手」と言われることが何回かあった。そのときは、悲しくて、悔しくて紙を破いてしまったけれど、今ならそれも全てのびしろというふうにポジティブに捉えるくらい絵が好きといえる。絵を描くために生まれてきたと思うくらいだ。私は自分のことを裏切らないためにもこれからも絵を描き続ける。有名になって皆を「あっ」と驚かせる。